

「イチダイ」へようこそ！



法学研究科・大学史資料室長

安竹 貴彦

「イチダイ」へようこそ！

念願かなって第志望で入ってきた人も、いわゆる「不本意入学（本当は××大を受験するはずだったのに、センターで失敗して仕方なく...）」の人も、この春からはみな同じ「イチダイ」生です。大阪大学を「ハンダイ」、大阪府立大学を「フタイ」と略称するように、大阪府立大学では本学は「イチダイ」の愛称で親しまれています。

ただ、いつ頃から「イチダイ」と呼ばれるようになったのかは、定かではありません。大阪市立大学の創立は1949年のことで、4つの前身校（大阪商科大学・大阪市立都島工業専門学校・大阪市立女子専門学校・大阪市立医科大学）が合流し、総合大学として歩みはじめました。ただし医科大学の合流は1955年。これら前身校はいずれも「大阪市立」であり、ずっと昔から大阪市民に愛され、親しまれ、必要とされた学校たちでした。みなさんもこれから（そしておそらくこれからずっと）、そんな「イチダイ」の大切な一員となるわけです。大学という組織は、教員（研究者）・職員・学生（院生）が一体となることで、はじめてうまく機能するものですから、「不本意入学」だった人も、それを長々と引きずっているヒマはないの

アン ロゾ Un roseau

総合教育科目ガイドブック

No.19

タイトル「Un roseau(アン ロゾ)」
—— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623-1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリユ・フェーブル・ドウ・ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

—— 人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。——

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、
考える（思考する、思想する）という行為によって有形の現象の世界（形而下の世界）のみならず、
その奥にある広い広い世界（形而上の世界）を知ることができる存在なのだ。
Un roseauとは「あなた」のことなのです。

「みる」とどうしよう



大学教育研究センター 大久保 敦

振り返れば、1年間の浪人生活の後、私が大学に入学したのは今からもう40年以上も前のことになりました。入試のできが思わしくなく、失意の心を癒すべく出かけた九州。その旅先の宿で渡された公衆電話の受話器の向こうから、妹の声が耳に飛び込んできました。そして、発せられた「合格」という思わぬことばに耳を疑いましたが、次の瞬間には得も言われぬ解放感を味わったことは、今でも鮮明に覚えています。皆さんはそれぞれ「その時」をどのように感じられたでしょうか。

「素心無限」ということばがあります（図1）。これは私が初めて大学教員として働きた山口大学の学長、広中平祐先生（数学のフィールズ賞受者の日本人3名のうちの1人）のことばです。このことばが示す通り、皆さんは無限の可能性を秘めています。私にとっては大学教員としての原点となることばです。また広中先生は、「量的変化は予測できるが、質的变化は予測できない」ともおっしゃっていました。大学では高校までの勉強や受験勉強とは異なる学びがあり、その大学での学びの過程で想像もつかない飛躍を遂げる可能性を誰もが秘めていることを示しています。私たち市大の教員や職員は、ゼミや卒業研究、あるいは実習などをはじめとする大学での学びを通して、飛躍的な成長を遂げてもらいたいと強く願って、毎年新入生の

です。「イチダイ」生として生きていく自覚を持ち、覚悟を決めていただかねばなりません。

自己紹介

かく言う私も1982年、一浪の末に大阪市立大学法学部に「不本意入学」しました。しかし、縁あって学生・院生・教員として「過」し、気がつけばこの春で、「イチダイ」生活は計36年におよびます。当然のことですが、入学時にはこれほど長いつきあいになるとは全く考えてもいませんでした。

古いけれど素敵な「イチダイ」

このように「イチダイ」ひと筋で、比較の対象を持たない私が言う「と真実味に欠けるかもしませんが、うちの大学は、なかなか素敵な大学です。杉本キャンパスには古い建物や設備がまだまだ残り残っていて、「も」と広げておしゃべりなところで学びたかったのに」という方もいらっしゃるでしょう。でも、それも本学の「味」の一つとして楽しんでください。なにしろ商科大学以来、80年以上にもわたって本学の教職員や学生が使い続け、数えきれないほどの汗と涙が染みこんだビンテージ物なのです。そして、じつはこの「伝統(ボロさ)」「こそが、「イチダイ」の重厚さ(ふと)の広さと深さ」の源でもあります。これに関し、「イチダイ」教員の立場から、借越ながら1点だけアドバイスをさせていただきます。

「運命の出逢いはきつとある(て信じて)」

これから皆さんは卒業まで、さまざまな分野の科目を数多く受講していくこととなりますが、正直、「毎回ワクワクドキドキして、次回が待ち遠しい!」というよう

な授業は、それほど多くないでしょう。私が生きたころの「教員の独演会」講義に比べれば、レジュメや資料をまめに配ったり、パワーポイントを使ったり、双方向を目指したりと、色々工夫をこらさすようにはありません。もちろん昔も今も、大半の教員が「自分の研究分野こそが一番面白いに決まっている!」と信じて疑わず、一生懸命に講義をしています。しかし、私を含め大学教員の多くは、無免許(教員免許を取得していない)で講義をしていますから、残念ながら小学校から高校までの授業のようには、なかなかいいかないのです。

それでも、この「イチダイ」のどこかに「きつと」運命の出逢い(ワクワクドキドキ)はあるはず。私の場合、それは「日本法制史(法や制度の歴史)」という科目(とその扉を開いてくれた教員)でした。正直に白状しますと、この科目の試験成績は「普通」でした。でも、その魅力に今も取りつかれたままで、一人でも多くの人に、私を感じる「ワクワクドキドキ」を伝えたいと今も日々、悪戦苦闘しています。

「大学のすべての講義に『ワクワクドキドキ』なんてありえない」と断言してしまってもよいでしょう。これから始まるみなさんにとって長い(実際にはとても短い)4年間は、この「運命の出逢い」を探し求める旅だと思ってみてはいかがでしょう。その点、「イチダイ」は「長い歴史を持つ総合大学」ですから、出逢いのきっかけ(メー)はとも盛沢山に用意されています。最初から欲張りすぎて消化不良を起こすのはいけません。運命の出逢い」を求めて、自分からあれこれ積極的に手を伸ばしてみてください。喰わず嫌いは良くありません。そして、もし「運命の出逢い」を感じたなら、今度はそれだけできるだけのめり込んでみま

皆さんを受け入れています。皆さんが「質的变化」を遂げていただく上で、参考になる話をこの紙面を借りて一つ紹介します。



図1 いただいた素心無限の書

ものを「みる」実験

私たちはものを「みる」ときに、網膜に届いた光の情報を全て利用しているわけではありません。その証拠にある「実験」を紹介します。

私は毎年、1回生対象の「大阪市大でどう学ぶか」という授業で、受講生に大根の絵を描いてもらいます。白紙を半分に区切り、まず左側に何も見ないで自身の頭の中にある大根のイメージを描いてもらいます(図2A)。次に本物の大根を持って教室の隅々まで回りながら、実物の大根(図3)を見せます。全員が見終わったところで、白紙の右側に今見た大根を描いてもらいます(図2B)。

この実験を開始して4年目になりますが、頭のイメージにある大根は毎年9割以上の人がAのようなスケッチを描きます。つまり、全体の形は細長いものから太くて短いものまで多様ですが、上端に葉の束を、また真ん中より下半分の場所にひげ根を描いています。そして写真(図3)のような細長く、茎の根元を残して葉を切り取った大根を見せると、多くの人は全体の形を細長く、また大根の葉は切られた姿に描きなおされます。一方、ひげ根はイメージと同じ、そのまま描かれています。しかし実際には、写真(図3)の

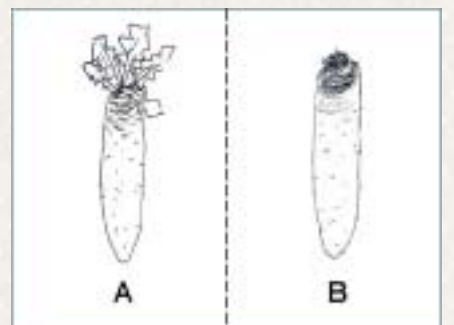


図2 大根のスケッチの一例
Aは何も見ないで描いた大根、
Bは実際の大根を見た後に描いた大根

ように、根は列状に配列(赤い点線)していることがわかります。この写真ではわかりませんが、反対側にもう1列、合計2列緩い螺旋状に配列、つまり根が規則性をもって配列しているのです。



図3 実際に見せた大根の写真

全員が同じものを「みている」のですが、このことがスケッチに反映されている人の割合は多くて5%ぐらいです。これまでに他大学の学生や中学生、高校生にもこの「実験」を行ってきましたが、いずれも同様の結果を得ており、再現性の非常に高い現象であることを確認しています。

脳で「みる」

この「実験」から、「みた」ものを全て視覚(画像)として認識していない、つまり、最初に述べたように網膜に届いた光の情報を全て利用しているわけではないことが示唆されます。

しょう。深入りすればするほど、実はその対象が他の分野(講義)といろいろなところにつながっていて、それらとも「お付き合い」しておかねばならない(と列挙)は、まずです。

「イチダイ」は生物

「運命の出逢い」は一つでも充分だと思いますが、もし複数あれば、とても充実した「イチダイ」生活を送れるはず。また、すぐに逢えなくても大丈夫です。「イチダイ」は一生モノですから、卒業してからも色々使えます。安くない学費です。きっちり元はとりましょう。

先輩たちからのメッセージ

やはり、「オヤジの説教」くさい内容になってしまいました。お許しください。それでは今回の寄稿に際し、私の講義の受講生たちに(講義中に「つそり」と)お願いして、「新生生にアドバイスするとしたら」という内容でメッセージを寄せてもらいました。「ついつい、お願い！助けて！」という教員の無茶な頼みに、気さくに応えてくれるのも、「イチダイ」生の素敵なこと。以下にいくつか紹介してみるところにしましょう。

(授業)出ましよう。聞きましよう。合格の安心感と解放感があるだろうけど、ラクしようと思わぬように。途中で脱落する人も少なくないけど、面白い話や、重要なお知らせが聞けるよ。真面目に取り組むクセを1回生からつけて。シラバスはしっかり読んで決めよう。予習・復習は大切(特にテストのためには)、でも気合い入れすぎると続かないよ。意識高く保てるのは1ヶ月だから、最初からローギアのペースで。計画的に勉強しないと単位取得は厳しいかも。先延ばしにしていると絶対後悔するから。

専門書を通読する体力を早めにつけよう。(テスト)試験期間前から勉強しといて、試験はツライから。夜更かしするとテストに遅刻するよ。テストは情報戦だから、友達が多いほど良いよ。

(サークル活動)サークル・部活には入って複数入って(合わなければやめる)。あんまり掛け持ちすると潰れてしまうよ。きちんと選ばうね。高校の部活と同じサークルもイイよ。

(生活全般)学部選択を誤ったと思っても、意外に何とかなるから。周囲や楽な方に流されずに志を高く持って。学問・サークル・趣味などやりたいこと・楽しいことを見つけて。何でも恐れずにやってみたら、「面白い」4年間が送れます。自分から積極的に行動しないでポットしてたら、気がつけば就活なんてことに。少しの勇気を出して、いろんな所へ顔を出してみ。大学生生活は楽しいけれど、楽しむためには努力(自発性と積極性)がいるよ。バイトのし過ぎには注意して。大学で多くの人と出会う、出会った人とはつながり続ける努力を。

いかがでしょうか? 「イチダイ」生って本当にメジメですね(無記名なのに正真正銘ヤラセなし!)。新生生のみなさんへ。こんな素敵な先輩たちが日々学び、遊び、愉しみ悩みそして青春している「イチダイ」へ、あらためてようこそ!

安竹 貴彦(やすたけたかひこ)

1962年生まれ
1991年大阪市立大学法学研究科後期博士
課程単位取得退学
現在、法学研究科 教授
専攻分野 日本法制史
全学共通教育の担当科目、大阪市大でどう学ぶか(分担)

人がはつきりものを見ているのは視野全体のうち、中心部分の角度にして2度程度とされています。この2度の範囲の光の情報は網膜で電気信号に変換され、視神経を経て脳に入り、さらにそこから情報は位置・運動を認識する経路と色・形を認識する経路に分かれ、これが再度脳の中で統合されるといふ処理を経て、初めて画像として認識されます。しかし、脳の処理能力にも限りがあります。特に画像は情報量が多いので、すべてを認識することは出来ず、過去の記憶、経験、習慣、考え、興味・関心等々をもとに、無意識のうちに取捨選択したり、あるいは逆に見えていないものを補うなど、自動処理をしています。

実際に実物の大根を目にし、根が列状に配列している光の情報が網膜上には届き、電気信号に変換され視覚神経を経て脳に届いてはいますが、自動処理の過程で、細かいひげ根が下半分全域を覆っているという「イメージ」が列状配列の情報を認識することを妨げていると考えられるわけです。

「みる」ためには意識することが重要

ここで賢明な皆さんは、ものを「みる」ためには脳での処理が重要であることに気が付かれたことと思います。ものを「みる」ことはよくデジタルカメラにたとえられます。レンズを通した光が網膜に相当するCCDなどの撮像素子などを経てデジタルの電気信号に変換され、脳に相当するイメージプロセッサで画像処理を施され画像が液晶に表示されます。そしていくらか性能の良いレンズ、CCD、イメージプロセッサを用いても、プログラムに問題があると処理が適切に行われず、よい画像を得ることができません。また通常オートモードのプログラムで画像は自動処理されますが、マニュアルモードや場面に

応じて風景モード、人物モード、夜景モードなどの処理プログラムが用意されているカメラもあります。脳においても通常はオートモード(無意識)で画像処理されているわけですが、根の配列を認識するために適切な処理モードを用意して切り替える必要があります。これが意識するということなのです。そして、意識すること(処理モードの用意と切り替え)を身につけるには訓練が必要なのです。

学びも「みる」ことに通ずる

学ぶことも「みる」こととよく似ています。授業では先生の話、スライド、教科書、プリントなどの媒体により情報が目や耳を通して脳に届きます。しかし、脳での情報処理のプログラムモードを適切に用意し切り替えないと、情報は読み取れないのです。授業が面白くないのは、このような理由が大きいかもしれません。また、若い時にわからなかったことが、年を重ねるとふとわかることがあります。これは情報認識のプログラムモードが更新されたためと考えられます。つまり、学びも意識することが重要であり、それは学びのプログラムモードを更新して適切に切り替えることなのです。そして、その訓練する場が大学なのです。「素心無限」、皆さんには無限の可能性が広がっています。

大久保 敦(おおくほあつし)

1954年生まれ
2000年 東京学芸大学大学院連合学校教育研究科博士課程修了 博士(教育学)
現在、大学教育研究センター教授
専攻分野 教育学・古植物学
全学共通教育の担当科目、大阪市大でどう学ぶか、初年次セミナー、森林環境と人間社会、「植物と人間(演習)」、体験で学ぶ科学と技術、大学院共通教育科目担当、学問・大学と社会、大学院キャリア形成論